

VI とちぎ県民の絆づくりに向けて

1 調査結果のまとめ

(1) とちぎ県民の絆

今回の調査の目的の1つは、現在本県教育委員会が進めている「栃木県生涯学習推進計画第4期計画『新・とちぎ学びかがやきプラン』」における基本目標である「とちぎ県民の絆づくり」をより具体的に捉えることである。

調査では、ソーシャル・キャピタルという視点から、本県の人と人とのつながりの状況や要因を捉えることから、「とちぎ県民の絆づくり」を明らかにしていった。

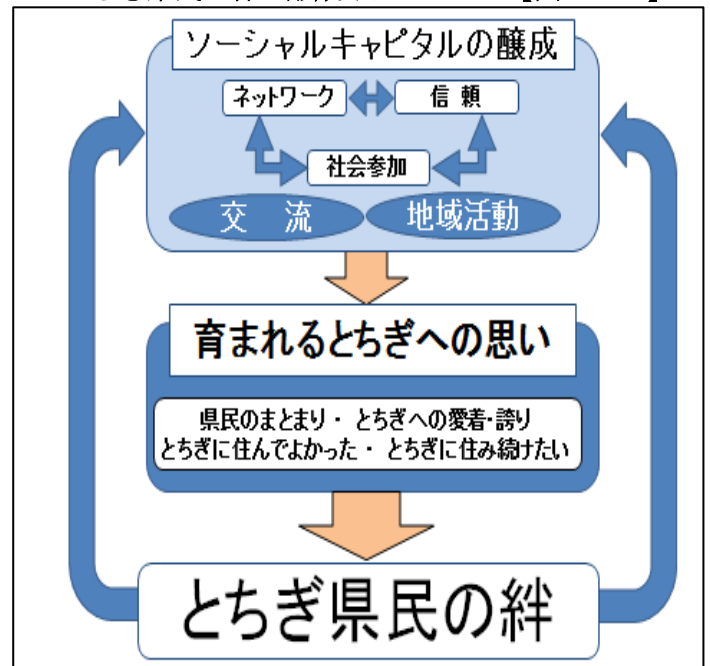
これまでの報告のとおり、まず、ソーシャル・キャピタルの醸成には、年代、居住年数、同居家族等の影響が見られた。そして、ソーシャル・キャピタルのそれぞれの要素は、1つの要素のみが独立して醸成されていくものではなく、「ネットワーク」「信頼」「社会参加（互酬性の規範意識）」というそれぞれの要素同士が密接に関連し合って醸成されていくことが見えてきた。

また、ソーシャル・キャピタルの醸成は、地域のまとまり、地域への愛着・誇りを感じる意識、地域への居住継続意識といった、「地域への思い」の醸成とも大きな関係性があることが確認できた。

これらを踏まえ、「とちぎ県民の絆」というものを考えてみると、豊かな人間関係を持ち、「とちぎに住んでよかった」「これからもとちぎに住み続けたい」という「とちぎへの思い」を感じる県民同士のつながり、つまり、交流・地域活動を通して信頼関係を育むことによって、地域への愛着や誇り、そして、地域に住み続けたいという意識をもった人同士のつながりということと捉えることができるのではないだろうか。

また、「とちぎ県民の絆づくり」を形成するイメージを【図126】のように表してみた。ソーシャル・キャピタルの醸成は、地域での交流を活性化させ、様々な活動を生み出すものと考えられる。そして、そこで育まれた「とちぎへの思い」をもった人同士のつながりである「とちぎ県民の絆」が作られていくという流れである。絆でつながった県民同士は、さらなる交流や地域活動へと循環し、「とちぎへの思い」、「とちぎ県民の絆」はより一層強くなっていくものというように捉えた。

とちぎ県民の絆の形成イメージ 【図126】



(2) とちぎ県民の絆づくりに向けて ～事業展開への提案～

今回の調査のもう1つの目的は、本県生涯学習・社会教育行政の今後の施策の方向性を示すことである。

近年、県外に目を向けると、生涯学習行政の首長部局への移管や事業の縮小等に向かう事例も見られた。しかし、東日本大震災に際して、被災地の多くで見られた住民の落ち着いた行動と速やかに復興に取り組む姿は、日頃から人と人がつながり、協力を大切にしてきた成果であることが明らかになり、社会教育の重要性が再確認されることとなった。

社会教育の大きな目標は、よりよい地域づくりにある。そこで、今後の本県の地域づくりという観点から、とちぎ県民の絆をより強いものしていくための施策の方向性として、大きく3点を提案する。

① 県民同士の交流の機会の充実 ～挨拶と幅広い交流の機会の創出～

調査結果から、ソーシャル・キャピタルの要素の中でも、「ネットワーク」、特に「地域の人との付き合い」を深めていくことが、「ネットワーク」そのものだけでなく、「信頼」「社会参加（互酬性の規範意識）」のそれぞれの要素を醸成していくポイントであることが見えてきた。

言うまでもないが、付き合いの基本は「あいさつ」である。問5(7)「よりよい地域をつくるために必要だと思うこと」への回答記述には、「普段から交流（挨拶）を（20代女性）」、「あいさつができる関係づくり（40代男性）」、「出会ったらあいさつをし合う（60代女性）」等々、幅広い年代から挨拶を重視する声が寄せられている。まずは、スローガンづくりやあいさつ週間等、教育委員会のみならず各方面で従来から挨拶の取組は行ってはいるものと思われるが、さらなる働きかけをしていくことを確認したい。

人とのつながりをつくるには、地域活動に参加することが有効である。（【表120】）

全県民が地域の人、友人、知人等との付き合い、交流があることは非常に望ましいことである。しかし、同居家族等の関係（独り暮らし等）により、なかなか人との交流の機会がもてない人がいることも想定できるし、若者と他の世代との交流が不足しているという声も聞かれる。

また、調査での「社会参加」では、「地縁的な活動」への参加意識が高く、充実した取組が行われている様子がうかがえたが、家族構成や年代の影響も大きい。未婚者や子供がいない家庭、親世代からの世代交代を受けていない若者等にとっては活動する機会が少ないとしてもやむを得ない。さらには、活動が多いことは良いことではあるが、負担を感じることも少なくはない。

そこで、これらに関わらずに参加できる活動として、地域のイベント等とボランティア活動等への参加の奨励を提案したい。地域の祭り・イベント・伝統行事等への参加率は、地縁的な活動への参加率を上回っており、参加しやすい活動であることがうかがえる。また、地域のまとまり、地域への愛着・誇りを感じる意識との関連も見られる。（【図121】【図122】）

問5(7)「よりよい地域をつくるために必要だと思うこと」への回答には、「定期的なイベント（スポーツ大会や季節ごとのイベントなど）が大切だと思う。（20代男性）」、「自治会・町内会等で交流つながりをもてる場をつくる。積極的に参加したいと思えるイベント。（40代女性）」等の記述が見られ、若い世代にもイベントは適切な交流の機会であることが意識されている様子がうかがえる。

ボランティア・NPO・市民活動への参加は、同居家族や居住年数等による取組へ影響が少ない活動であることが確認できた。

また、「ボランティア活動は自分のペースで行うことができるので、気分的にリラックスできる。ノルマがないのは良いことだと思う。（60代男性）」という記述があり、参加負担が比較的少ない活動でもあることがうかがえる。

イベントやボランティア活動等の開催・実施に当たっては、多くの人に届くような広報の充実等、情報が行き渡る工夫も考慮していく必要がある。

また、交流の場所として、公民館（生涯学習センター、コミュニティセンター含む）、自治公民館等は、年代を問わず多くの県民から利用されている。利用は若い世代が多いが、地域の公園も交流場所としては今後注目していくべきであろう。（【図123】）

様々な障害もあろうが、気軽に交流できる機会や場づくりは、よりよい地域づくりのためには必要不可欠である。企画・実施は単独の部署が独自に進めるよりも、関係部局、関係機関との連携はもとより、地域のリーダーをはじめ地域住民とともに計画して推進していくことが、様々な課題を乗り越え、効果をさらに大きくしていくものと思われる。

② 地域を学ぶ学習機会提供の充実 ～地域の魅力、すばらしさを学ぶ～

今回の調査からは、ソーシャル・キャピタルの醸成と地域への愛着・誇りを感じる意識には、密接な関連があることがうかがえた。愛着・誇りは押し付けられるものではないが、生涯学習・社会教育行政として、よりよい地域づくりのためにも愛着・誇りを感じる意識を高めていくための支援は必要であろう。

そこで、大きな2つ目として、郷土のすばらしさの発信と地域を学ぶ学習機会提供の充実を図ることを提案したい。本県は印象が薄い県というイメージで見られることもあるが、自然、歴史、文化財の豊かさ等、全国にアピールできるものはたくさんある。これらの本県の魅力やすばらしさを学ぶことは、愛着や誇りを

育むことに大いにつながるものとする。

また、普段は意識していないが、県内至るところに現在でも受け継がれている、その地域、地方の伝統行事や習俗、伝承、守られてきた自然や歴史遺産等について学ぶことは、地域への関心を高め、地域おこし等の活動を生み出すきっかけにもなり得ると思われる。

これらの学習機会をより効果的なものにする手立てとして、地域のシンクタンクである、公民館、博物館、資料館、図書館、美術館等の生涯学習関連施設との連携は有効であろう。各施設には人的、物的資源が豊富に蓄えられている。これらを講座等に生かすことは、受講者の興味・関心を高め、充実した学びとなることであろう。

また、学びを通じた交流を図れるよう、講話で終了とするのではなく、わずかな時間であってもグループトーク等の時間を設けて講座の感想や地域への関心等を語り合うことは、さらなる学びや活動にもつながることと期待できる。

③ 受け継いでいきたい「人との交流・つながりの大切さ」 ～顔と顔の見える関係づくり～

年代を重ね、居住年数を重ねることは、ソーシャル・キャピタルの醸成や地域のまとまり、地域への愛着・誇り等の意識を高めるための要因の1つであった。しかし、年代や居住年数を重ねることは、当然ながらすぐにはできないことではない。そこで生涯学習・社会教育行政として、本県に住んでよかったという意識、本県に住み続けたいという居住継続意識を高めていくことが、結果的にはソーシャル・キャピタルや地域への思いを醸成することにつながるものと考えられることから2つの提案をしてきた。

ここで注目してみたのは、居住年数が短くても地域への愛着や誇りをもつ人がいるということである。例えば、居住年数5年未満、居住年数5～10年という居住年数が短い回答者の中にも愛着・誇りを感じる意識が高い回答者がいる。そこで、属性や他の問いとのクロス集計を行ったところ、問1(1)「人と会って話をしたり、一緒に活動したりして、交流・つながりをもつこと」への回答に特徴が見られた。【図124】【図125】のとおり、「地域への愛着や誇りをとても感じる」と回答した人は、いずれも問1(1)の問いに対して「大切だと思う」割合が100%であった。つまり、居住年数は短くても、人と直接会って、一緒に活動したりして、交流・つながりをもつということは大切だと思う人は、地域への愛着・誇りを感じる意識がとても高い傾向が見られる。

このことから、最後に「人との交流・つながりの大切さ」を伝えていくということを提案したい。

生涯学習・社会教育の様々な場面で「人と直接会って話をしたり、一緒に活動したりして交流・つながりをもつこと」、言い換えれば「顔と顔の見える関係づくり」が大切であるということ、声に出して言い続けていくことを心掛け、特にこれからの未来を担う若者や子どもたちもしっかりと伝えていくことが、彼らに未来を委ねていく我々大人の責務であるとする。

2 終わりに

新・とちぎ学びかがやきプラン推進プロジェクトチームでは平成24年度に実施した「地域課題に関する意識・行動調査、地域課題に関する取組状況調査」から、「高齢化」、「防災・防犯」、「住民同士の交流」、「家庭教育支援・子育て支援」、「市街中心部の空洞化」等が本県の主な地域課題であると報告している。

今回の調査で取り上げてきた、人とのつながりや地域での活動状況を分析する中で、これらの課題を根本的に解決していくためには、人々のつながりを強くし、地域住民が中心となって解決策を考え、行政とともに様々な取組を試みていくことが大切ではないかと考えた。

本調査は、とちぎ県民のつながりの概要を捉えるための一方策として、ソーシャル・キャピタルの視点を活用して分析を行ったものである。今後地域づくり等の参考として、本報告書を活用いただければ幸いである。

最後に、調査への御協力をいただいた市町教育委員会、その他関係諸機関等の皆様に対し、心から感謝を申し上げ、調査報告とさせていただきます。

〈参考文献〉

- ソーシャル・キャピタル入門 - 孤立から絆へ 稲葉 陽二 中公新書 2011
- 孤独なボウリング—米国コミュニティの崩壊と再生 ロバート・D. パットナム 柏書房 2006
- わが国のソーシャル・キャピタル政策展開に向けて報告書(社会生活に関するアンケート調査に関する報告)
ソーシャル・キャピタル政策展開研究会 2008
- コミュニティ機能再生とソーシャル・キャピタルに関する研究調査報告書
内閣府経済社会総合研究所編 2005
- ソーシャル・キャピタル ～豊かな人間関係と市民活動の好循環を求めて～ 内閣府国民生活局 2003
- 農村におけるソーシャル・キャピタル研究会とりまとめ 農林水産省 2007